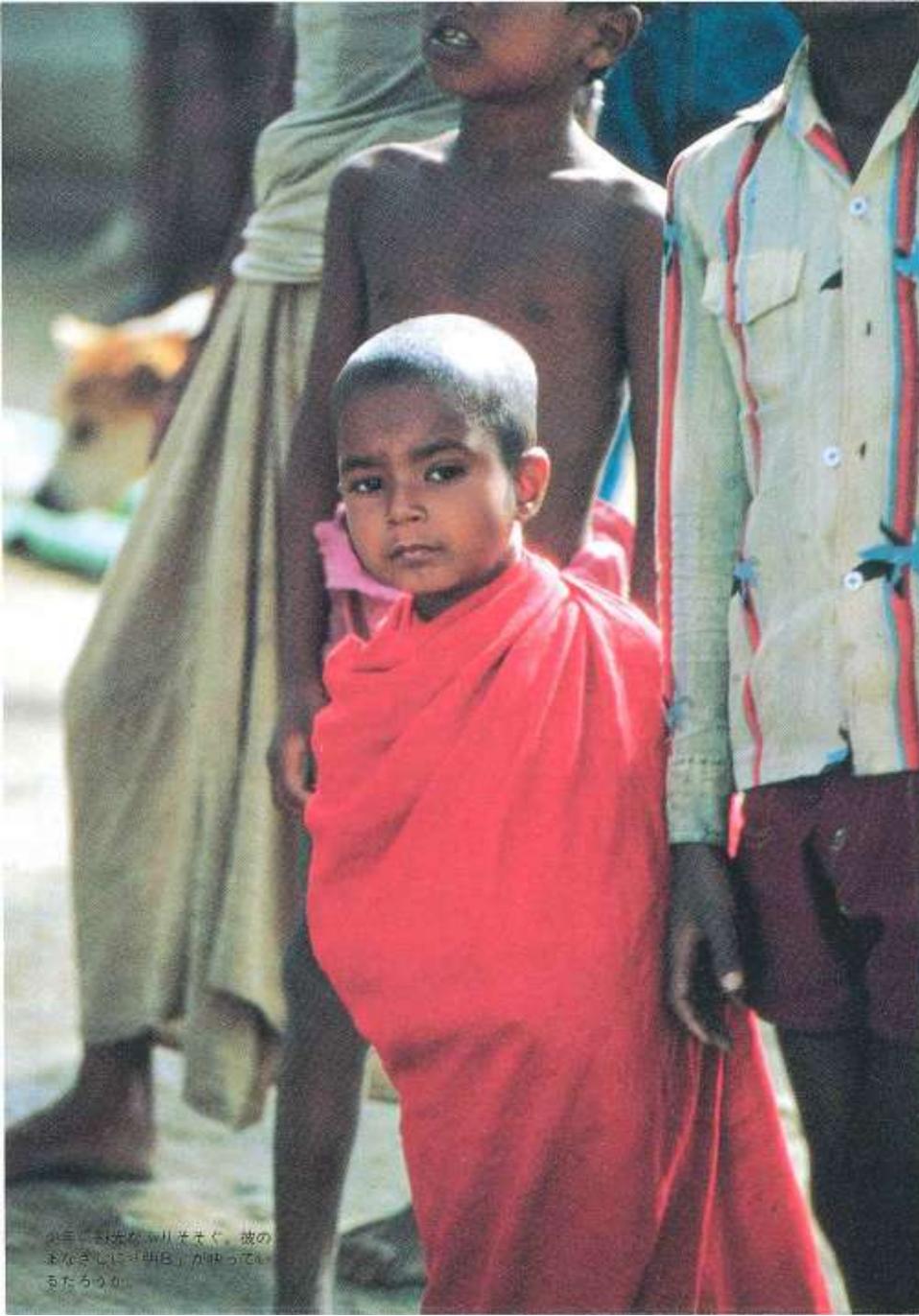
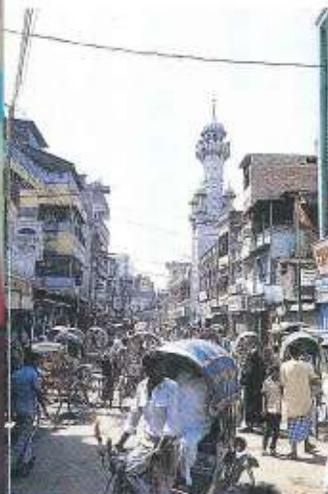
まい あーと・シルクスクリーン「くじゃくの時間」by 靉嘔

少年に陽光がふりそそぐ。彼のまなざしに「明日」が映っているだろうか。

ダッカのほのかな光

いままで日本からの眼は
バングラデシュの悲惨な局面のみをとらえ
民族がもつ「希望の力」を見おとしていた
首都・ダッカを取材したカメラは
この国をおおう微かなほほえみを観た

●

写真／天野武男（本誌）
協力／(財) 日本ユニセフ協会

(上) 下痢をして脱水症状で病院に運ばれてくる子供に与えられる重湯(経口補水塩)。

(右) 危篤状態の子供の後に、元気を取戻して重湯を食べる子供がいる。〈ダッカにて〉

(左) ダッカの人々の生活が滲むオールド・ダッカの商店街。

(上) 日向の道を歩く子供たちの表情は明るく、貧しい生活にも負けない力強さが感じられた。

(上) 目の病気の予防にビタミン剤を投与される子供。

(左上) 予防接種に集った母子たち。〈マニックガンジにて〉

(左下) 小学校の授業。国中の子供の半分しか学校に行けない。

花の香りに歌声のせて

今、立川ではコーラスが盛んだ。様々な人が色々なサークルに参加して楽しんでいる。その中でも平均年齢が72歳の方達が集まった「ことぶきコーラス」が初めてのコンサートを開いた。「花いっぱい・ふれあいコンサート」と題され、応援に駆けつけたコーラスグループとともに四百人は一体となって、花いっぱいの一時を楽しんだ。

▶「ことぶきコーラス」の熱唱

この日、初めてのコンサートを開いた「ことぶきコーラス」は、58年の4月に結成して今年で5年になる。もともと中央公民館に集まるお年寄りの寿教室というサークルに来ていた人々が始めたものだが、今では62歳から84歳までの55人のメンバーになった。寿教室で七宝焼きを作ったり、編み物をしたりと色々な趣味をもつ人が多いだけに、初めてコーラスをしても勘がいい。中村一郎先生（国立二中音楽講師）の指導のもとにメキメキと上達してきた。今までもママさんコーラス大会などに参加しているが、自らのグループが中心となってのコンサートは初めて。5年間の成果が一挙にあらわれた。

武島羽衣作詞、滝廉太郎作曲の「花」、江間章子作詞、中田喜直作曲の「夏の思い出」、杉紀彦作詞、磯部俶作曲の「武蔵野を歩く歌」などおなじみの歌を披露した。ハリのある若々しい歌声に会場の中央公民館に集まった四百人の聴衆はうっとり。

他に中村先生が指導している心障者のコーラスグループ「立川青春学級」とママさんコーラスグループの「諏訪の森コーラス」が友情出演して増々会場は盛りあがった。

このコンサートで、立川のコーラスグループの層の厚さが良く出ている。会場に集まった人も様々で、歌うグループと聴衆とが一体となって会場は暖かな空気で包まれていた。日頃、同世代の人とばかり接している人には新鮮だったようだ。まさに世代を越えた「ふれあい」のコンサートだった。

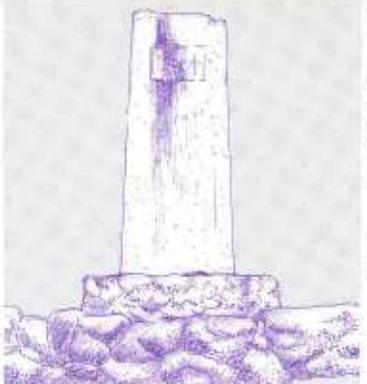
いっぱいに咲いた花の香りの風にのって、若々しい歌声は、どこまでも流れて行った。

▲友情出演の「立川青春学級」

立川のモニュメント 5 「中島次郎兵衛顕彰碑」

中村次郎兵衛　政界・実業界で活躍した中島次郎兵衛を顕彰するため、死後4年目の明治44年、中島家敷地内に建立された。

現在は、家が近くに移転したため門と、この碑のみ残されている。

人の心は移ろいやすい。生前、華やかな生涯をおくった人も、死後、数年もすればいつのまにか、忘れ去られてしまう。誰かの詩の一節に「いちばん不幸なのは、忘れられた女です」というのがあるけれど、人々の記憶を喚起する意味でも顕彰碑の存在は大きい。

南口、諏訪神社前の通りを南へ歩くと、ほどなく右手に木の門と、その奥にある大きな碑が見えてくる。この石碑は、中島家13代の次郎兵衛の功績を讃えたもの。

中島家は、江戸時代から続く家柄で、『公私日記』で知られる鈴木家等とともに交代で名主を務めるほどの家だった。

その13代当主、中島次郎兵衛（一九三七～一九〇六）は、明治という激動の時代をそのままに、生きたような人だった。自由民権運動に共鳴、自由党に入党、その後神奈川県会議員になる。また第七八国立銀行取締役を始めとして財界でも活躍。府立二中（今の都立立川高校）誘置のため奔走する。その華麗な経歴は、西園寺公望の篆額による碑に記されている。

この碑文を読むと、明治という時代を70年の生涯の中に体現してみせた男の足跡が、確かに伝わってくる。

歴史が生きている・・・。そう実感させてくれる立川のモニュメントのひとつだ。

（H・H）

漢字テスト⑰

空欄に一字押入を試みよ。

荊　妻　□　児

有　象　□　象

表紙は語る

〔虹の画家〕とよばれる靉嘔氏の作品が多摩信ギャラリーに展示された。

美しい色合いは一色一色をす分の違いなく刷って重ねる精緻な仕事から生まれる。虹と孔雀の不思議な取合せに氏は「綺麗な孔雀が壁に掛けられたらと人は考える。風景画が窓だとすると、孔雀の絵はえさのいらない美しい鳥を飼っていることになる。孔雀の色は虹色ではないが、輝きは虹に感じられるほどなのでそのリッチな輝きが人は好きなのだ」と語る。きらきら輝く孔雀の羽根色に虹を見た氏は孔雀自体を虹にしてしまった。「写真は写した時の個人的な時間が加わってしまう。記憶は良いことばかりではなく、つらいこともあるものだ」ともいう。孔雀という具象を虹というイマジネーションの世界に見るものを誘うことにより孔雀に生命をふき込む。「〈くじゃくの時間〉は永遠の時間を表現したかった」という氏は常に人の心に在続ける孔雀を誕生させた。

一色一色に生命を織り込むように重ねて行った時に作品に永遠の時間が与えられるのだ。

Photo;Sigeo Anzai/Fuji Television Gallery

漢字テスト・答

荊妻豚児（けいさいとんじ）
自分の妻子に使う最大級の謙遜の呼びかた。

有象無象（うぞうむぞう）
数は多いが、つまらない者どもの意。仏教では宇宙に存在する有形、無形の一切を示す。

真如苑だより

さわやかな風が木々を渡ると、緑の小さな葉も一段と輝きを増します。生命がもえる季節です。

真如苑にも緑の風がそよぎます。今月も皆様のお越しをお待ちしております。

■日時　6月13日(土)
午後2時～4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■立川市民（成人）に限らせて頂きます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

工房から

●本誌でカメラの協力を頂いている天野氏の写真展「ダッカのほのかな光」が5月28日(木)から6月3日(水)まで立川駅ビル（ウィル）の朝日ギャラリーで行われる。●カラーページで紹介したのはその一部。他に30点あまりの作品が展示される。被写体の奥深くまでを捉えた氏の作品に触れて、今までのバングラデシュという国にもっていたイメージが少しばかり変わるかもしれない。●十二回続いた「立川御馳走館」は今月号で終わり、来月から新連載がスタート。題して「立川看板娘」。お店の顔、というだけでなく街を明るくしてしまうような女性、周囲に微笑をもたらすような女性が続々と登場します。一人一人が誌上に華を咲かせてくれます。●なつ燕　翔ぶ空青く　えくてびあん

（編集）石塚敦美　大野玲子　神山清子　隅川理　田中恵子　原田礼子　半沢正弘　東島弘子
（写真）天野武男　板橋一明　吉田義治　スタジオ269

月刊えくてびあん　第35号
昭和六十二年六月一日　発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市柴崎町2-4-11
ファインビルディング　3F
電話　〇四二五(28)〇〇八二
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　株式会社 立川印刷所

ニックネーム募集
立川北口 味の散歩路★★
★
日本語でも外国語でもOK
〆切 '87.6.30迄　発表 7.7.
優秀賞 1名 20万円　佳作 5名 3万円
参加賞 100名 テレフォン・カード
★
ハガキにニックネーム、住所、氏名、年令、職業、TEL No.、勤務先を明記の上応ポ
〒190 曙町2-4-28
エミリーフローゲ内 ニックネーム募集係迄

たちかわ伝言板

立川

御馳走館

ごちそうかん

12・最終回

創る人がいて
味わう人がいる
この華麗なる
当り前の世界

9年前に立川で店を開いてから、原田政義さんは鳥料理一本で貫いてきた。仕込みに手間ひまをかけて作りだす料理の種類の多さが自慢。揚げ物にも鳥油を使って香りを大切にする心遣いも忘れない。気さくな節子夫人の暖かなサービスで和む店内の空気と、原田さんの確かな腕が調和して、「とりー」の屋号は心意気だけにとどまらない。錦町川野病院前　☎25－4681

▲右・つくね　１本￥150
　左・やきとり　１本　￥80

▲とり雑炊　￥550

▲なんこつ揚げ　１本￥150

▲とり酢のもの　￥500